北京オリンピックを振り返って

髙島　規郎

今やオリンピックはスポーツの祭典であると同時に、巨大化したオリンピックは、スポーツビジネスとして加速している。北京オリンピックも肥大化した様子をマスコミ等で発信され問題視されているところも多かった。

アジアでのオリンピック開催は1964年（東京）、1988年（ソウル）、2008年（北京）で3度目であり、テレビやマスコミから中国では8という数字が縁起の良い数字と考えられ、開会式は8月8日午後8時8分にスタートした。

北京オリンピックでの実施競技は28競技で、陸上、バレーボール、サッカー、体操、トライアスロン、アーチェリー、セーリング、テコンドー、テニス、ソフトボール、野球、水泳、近代5種、柔道、卓球、ホッケー、ハンドボール、ウエイトリフティング、馬術、自転車、フェンシング、バスケットボール、ボクシング、カヌー、ボート、バドミントン、ハンドボール、レスリングの28の種目で、新体操・トランポリンは体操競技、ビーチバレーはバレーボールの中に含まれている。オリンピック競技もその国での競技の普及にも影響し、マスコミの注目度によって大きく取り上げられる。日本でもやはり金メダル候補の柔道や水泳、野球、ハンドボール、サッカー、バレーボール、卓球等マスコミ受けする種目に注目が集まった。特に私は永年卓球界に身を置き、専門的立場から卓球競技について感想を述べる。

卓球がオリンピック競技になったのは、1988年（ソウル）からである。今回が6回目のオリンピックであるが、前回までの5回のオリンピックでは、男女シングルス、男女ダブルスの4種目であったが、北京オリンピックから男女ダブルスに代わって、団体戦が採用されたことで非常に盛り上がった。団体戦は、1ゲーム3名で構成され、1ダブルス、4シングルスで3番がダブルスで行われ、試合は5ゲームズマッチである。卓球選手の出場数は男女56名、男女合わせて4種目となっている。日本代表選手の人気№1はなんと言っても福原愛選手（早大）19歳である。福原選手は日本スポーツ親善大使としても活躍している。昨年5月8日「2008年日中青少年友好交流年」の開幕式において、来日した胡錦濤国家主席と友好のラリーをし、歴史的交流が行われた。1971年世界卓球選手権名古屋大会での「ピンポン外交」で、中国は卓球を通して国際社会への復帰を果たしたことを思い出した。また、福原選手は、日本オリンピック委員会（JOC）から日本代表選手団の旗手に選出されたのも、日中両国における貢献度の大きさが評価されたとも言われている。

4年に1度のスポーツの祭典は、世界各国から28競技のトップアスリートが集まる最高の舞台となり、世界中のメディアが注目する。卓球会場は北京大学体育館で収容人数は約8,000人であり、中国の中でも卓球は「国技」として、他のスポーツ競技よりも注目度が高く、「国球」とも呼ばれ、絶対的な人気とその使命は中国選手にとって大きなプレッシャーといえる。しかし、世界的レベルは常に中国がリードし、心、技、体ともにスキがなく独壇場ともいえる。また、中国選手あわせて86名（1軍・2軍）が、北京市郊外で1週間の軍事訓練を実施し、強化合宿では、テレビや携帯電話やパソコンも使用禁止といった徹底した厳しい訓練を行い、自国開催のオリンピックに備えた。結果はやはり重圧に打ち勝った最強軍団の中国チームが完勝した。男女団体をはじめ、タイトルを独占し、会場を盛り上げた。

日本男子選手の活躍は、団体戦でメダルを逃したが、ロシアや香港を破り、準決勝に進出した戦

近畿大学健康スポーツ教育センター
〒577-8502　大阪府東大阪市小若江3-4-1

いぶりは立派であった。女子団体戦も、オーストラリアや中国帰化選手のいるスペインにも勝利し、韓国と準決勝を行ったが、ストレート負けに終わった。男女共、メダルには届かなかったが、団体4位という立派な結果を残すオリンピックであった。特に中国で大人気の福原選手の活躍には、大いに会場を沸かせた。大会前から日本は団体のメダル獲得が期待されていた。世界選手権（広州）団体では男女とも銅メダルを獲得していたため、メダルの期待も大きかったが、オリンピックでは銅メダル決定戦が行われ、メダルは3個のみであったため、あと一歩のところで敗れている。団体戦の盛り上がりが前半で終了したため、後半の個人戦では中国勢のみが目立っていた。

卓球競技においては、以前から中国のメダル独占と世界中の国々に中国帰化選手が活躍し、世界の中国化が問題視されている。オリンピック種目から外れるのではと考える人も多く、観客の卓球離れにもつながる深刻な問題にもなっている。国際卓球連盟（I.T.T.F）が帰化選手、移住選手の試合出場の制限をルール化することになった。年齢制限との諸問題もあるが、世界各国が注目している。今後の日本卓球界の強化も北京オリンピック後の強化方針も打ち出され、メダルを逃した悔しさを胸にさらなる高い目標に向かって進化してほしいと願っている。

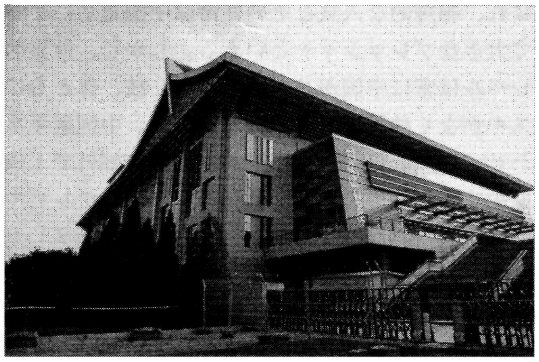

写真1．北京大学体育館

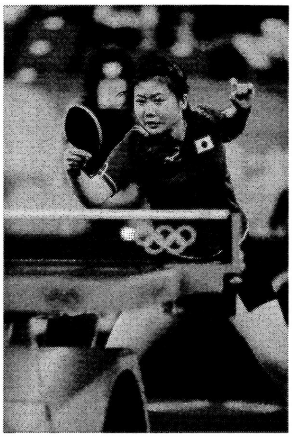

写真2．福原愛選手（日本）

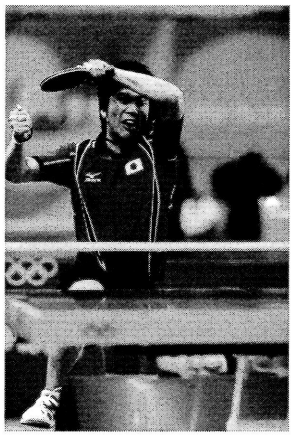

写真3．日本のエース 水谷隼選手

写真4．オリンピック女王 張怡寧選手
（写真提供：卓球王国）